

監査ファイル

1

映画の中の会計士たち……あはは 事件

— 除却とキックバックの話 —

1

とある監査法人に、ほかとは一風変わった監査チームがあった。

特に決められたわけではないのだが、彼・彼女らはいつも窓際の席に座っていた。

いつもパソコンにはかり向かっていて監査をしない者、財務諸表の表示チェックを趣味としている者、派手なブランド物を身にまとう金髪の者、婚約者のことを何よりも優先する者、頼りなくいつもあたふたしている者、アイドル並みのルックスで天真爛漫・傍若無人な者……。実際、窓際族のような扱いを受けていた彼・彼女らは、いつしか周りから窓際の監査チーム、通称 ウィンドウズ と呼ばれるよう

になった。ウィンドウズ は行く先々で起こる問題に直面しながらも、不思議とその問題を次々に解決していった。

しかし、そんな ウィンドウズ に最大のピンチが訪れようとしていた。

張り巡らされた陰謀、迫り来る闇の組織、そして一点のミスもない完全トリック。

絶体絶命の ウィンドウズ はこのピンチを乗り切ることができるのか！

「そして ウィンドウズ に明日は来るのか。『ウィンドウズ戦記 THE MOVIE』 六月一六日より全国五大都市で公開！ 乞うご期待だつて。カッキー、じれってどう思う」

映画パンフをパラパラとめくりながら萌さんは僕に尋ねてきた。

「会計士が主人公の映画なんてすごく珍しいですよね。だって我々の仕事って、基本的にマイナーじゃないですか」

僕は調査作成の手を止めて答えた。僕はここの監査スタッフ柿本一麻^{かきもとかずま}、上の人からは『カッキー』と呼ばれている会計士補二年目である。

「そうよね。スポーツで言ったらハンドボール。果物で言ったらビワ。関東で言っ

たら埼玉。うちのチームで言ったら定家くん^{さだいえ}、って感じかしら。みんな名前は知っているんだけど、マイナーな匂いがプンプンするのよねー」
 ハンドボールやビワや埼玉、さらにはこの場にはいない定家さんに対してずいぶんとひどいことを言っているのは、今いる会社の主査をしている現役女子大生の公認会計士、『萌さん』こと藤原萌実^{ふじわらもえみ}である。

「でもこの映画がヒットすれば、会計士の知名度も上がってもっとメジャーな業界になるかもしれませんよ」

「ヒットすれば、ねえ。でも会計士の話なんだから、難しいんじゃないかしら。会計士の仕事には監査・税務・MAS業務^[01]ってあるけど、どれも映画にするにはイマイチなのよねえ」

「そうですね？ 監査業務で不正を暴いたり、トリックを見破ったり、悪徳企業を懲らしめたりとかする話だったら面白そうじゃないですか」

「だったらいいけど、もし普段の地味な監査業務を描いた映画だったらどうする？ 『借入金が一年以内なので固定負債ではなく流動負債にしてください』とか『前払費用と前渡金の順番が逆なので換えてください』とかを会社にお願するだけの映画

だったら」

「それはビックリするほどつまらない映画ですね……」

2

僕ら二人が来ているのは、株式公開準備のための監査に入っている映画制作の独立プロダクション（株）鎌倉フィルム・エンタープライズ。

僕らが監査をしているのは、なぜか鎌倉フィルム・エンタープライズの倉庫。適当な監査部屋がなかったの、倉庫に机を入れて使わせてもらっているのである。

『今度映画が公開するんだが、キミが行ってくれないか』って代表社員^{やまがみ}の山上さんに言われてね、どんな映画が見れるのかしらって期待していたら、映画の公開 じゃなくて 映画会社の株式公開 だったのよねえ。ホント、あのオヤジにだまされたわ」

萌さんは倉庫内にある映画の小道具で遊びながら、悔しそうに言った。

株式公開 とは、会社の株式を一般の人にも買ってもらえるようにすることであ

代表社員とは、監査法人の経営側の人々で監査の責任者でもある。ただし人数が多いので、一般企業でいえば、社長から課長クラスまで全員が代表社員という感じである。

MAS業務とは マネージメント・アドバイザーサービス 業務のこと。会計士の財務の知識や経営の情報をいかして、企業の経営全般にわたる助言や指導を行うこと。近年、ニーズが急速に高まっている。

る。具体的には、会社は監査を受けた後に株式を証券取引所に上場するので、株式上場とも呼ばれる。

「だからといって僕にまで『映画の公開に呼んであげるわよ』とメールするのはやめてください。朝からウキウキしてきちゃったじゃないですか」

「だったら、集場所が鎌倉駅前って聞いた時点でオカシイと思いませんか。明らかに変じゃない」

僕はとぼつちりを受けた拳句、ここでは逆切れされた。

気を取り直して、気になっていたことを質問してみた。

「あのー、株式公開準備の会社の監査ってそんなに大変なんですか」

「まあね。まだ会社の内部組織が発展途上なんだから大変なのよ。制作費や宣伝費も、ちゃんと正しい金額が経理部に報告されているかどうかもわからないしね」

「内部統制ないがしろがまだしっかりしていない、ということですね」

内部統制とは会社内部の管理体制、チェック機能のことである。会社内部で不正やミスが起きないように、組織を改善して人員を配置したり規則を作ったりして

何重ものチェック機能を作り上げるのである。

株式公開をする会社は、この内部統制がしっかりできていないと株式公開が認められない。

「内部統制で最も強化しないといけないのは、お金や権力が一番集まっている所よ。そういう所が不正の温床になるからね。この会社で言うなら、それは……」

萌さんはすでにどこかに狙いを定めているようであった。

倉庫にはテープや台本などが無数に並んでいるのをいいことに、萌さんは「会社を理解するために必要なの〜」とか言って、ずっと映画のパンフや企画書ばかり見ている。

「それにしても、映画ってリスクの高い業界よねえ」

パンフをめくりながら、萌さんが言った。

「数字を見てもそうですね。この会社は制作費だけで一本当たり平均五億円はかかっているようです」

「映画館に配給するための費用や宣伝費もそのくらいかかっているみたいね。これ

を回収するだけの売上を上げるのもなかなか大変よ」

「あー、売上のほうは一体どういう仕組みなんですか」

「売上はね、公開を配給会社に頼むんだったら配給会社から入金があるんだけど、製作会社が直接映画館と契約するんだったら 売切り制 と 歩合制 があるわね」

「売切り制と歩合制？」

「売切り制はその名のとおり、映画を一本いくらで売ってしまつものよ」

「では、歩合制のほうは？」

「カッキー、興行収入 っていう言葉を聞いたことある？」

「映画の宣伝とかで 興行収入ー 億円突破！ とかで使われるものですよね」

「そう。観客が支払った入場料の合計額を興行収入っていうんだけど、この興行収入を歩率って呼ばれる一定の割合で映画館と分け合う方式を 歩合制 っていうの。観客数に歩率を掛けた金額が売上になるのよ。邦画の場合だいたい歩率は五割だから、興行収入が一 億円だったら、五億円が映画会社の売上になるっていう仕組みなの」

萌さんはすらすらと説明した。

「さすがは映画会社の主査ですね」

「別に。主査は関係ないわよ」

「関係ないって、どういふことですか」

僕は萌さんの言っている意味がわからなかった。

「……この主査になる前から知っていた、っていうことよ。実は私、前から映画に興味があったの」

「本当ですか、初耳です。やっぱり女優になりましたか……」

萌さんは今人気の女優にも引けを取らないくらい美人なので、素直にそう思った。

「へえー。ねえカッキー、私、女優になれると思っ？」

萌さんはまっすぐに僕を見つめながら尋ねた。

「えっ、えっ。なっ、なれると思います、やっぱりキレイですし……」

下ギマギシながら僕は答えた。

「ありがと。でも、あんまり女優には興味ないのよねえ」

「……何のための質問だったんですか」

「私になりたいのはやっぱり映画プロデューサーなのよねー。企画して、資金集め

して、役者をそろえて、監督をサポートして、宣伝活動なんかもして。映画に関わる幅広いことができるのよ。「これって魅力的じゃない?」

「何でもできる、っていうのは楽しいかもしれないね」

「そうそう。だから、私はプロデューサーになりたくて会計の勉強を始めたのよ。ほらっ、プロデューサーって映画に関わるすべての費用を扱うわけじゃない。資金管理とかが重要だから、会計の知識も必要だと思ってね」

「それ、今思いついたかのように言いましたね」

「とっ、とにかく、私は将来、映画プロデューサーになるためにも今は会計のお仕事をがんばるの!」

そう言って萌さんは席を立ち、倉庫の隅へと向かった。

「絶対、遠回りだと思っんですけどね……」

しばらくすると萌さんはファイルを何冊か持って戻ってきて、それを熱心に調べ始めた。

「そのファイルは一体何ですか」

「映画館の事業報告書よ」

「映画のパンフに飽きたらまず、今度は映画館の情報が知りたいんですか。もうそろそろちゃんと仕事をしてくださいよ」

「違っわよ。映画館はこの製作会社にとってはお得意先に当たるのよ。売掛金の回収可能性とか検討しなきゃならないじゃない」

「だったら、全国の劇場を見てくださいよ。萌さんが手にしているのは渋谷や吉祥寺といった萌さん自身の活動範囲内のものばかりじゃないですか」

「……カッキー、あんたよく見ていたわね」

僕の指摘に萌さんは後ずさりした。

「萌さんが映画会社で遊ばないように見張ってくれ、と山上さんや大津さんからさっきメールが来ていましたから」

「もっ、あのオヤジたちめー。でっ、でもこの事業報告書を見てみなさいよ。ちょっとおかしいじゃない」

萌さんは事業報告書に書いてある文章の一部分を指差した。

「えっーと。』当社はさらに客層を広げるために改装工事を行い、本年三月にリニ

「ユーアルオープンを果たしました」というところですか？　ここが、どうかしたんですか？」

「これじゃ、つじつまが合わないじゃない」

「ちいど、つじつまが合わないんです？」

「ほら、このうしろのほうのページを見てみなさいよ。財務諸表とかが載っているでしょ」

「あつ、本当ですね」

「小さな規模の会社の事業報告書って、商法の計算書類をそのまま使っているケースも多いんだから、ちゃんと見ておかないとダメよ」

「萌さんに言われて、僕は財務諸表をじっくり見てみた。」

「萌さん。リニューアルオープンの件ですが、財務諸表のほうとはちゃんと合っていますよ」

「ぶつってそう言えるの？」

「ちゃんと建物附属設備や器具備品が去年よりも大幅に増加しているからです。これは、改装工事がきちんと帳簿に反映されている証拠だと思います」

僕は自信満々に言った。

しかし、萌さんのため息をついた。

「ぶつ。カッキーもまだまだねえ。改装工事があつたからって、すぐにB/Sの有形固定資産のほうを見たんでしょ」

「えっ、ダメなんですか。では、どこを見たらよかつたんでしょ」

「P/L^[04]の特別損失のほうよ。改装工事があつたんだから、それまで使っていた附属設備や備品類を処分したはずでしょ。だったら、普通なら固定資産除却損^[05]が出てくるはずじゃない」

「あつー。そう言われればそうですね」

さつそく、僕はP/Lのほうを見た。すると、固定資産除却損はもちろんのこと、固定資産売却損益も出ていなかった。

「萌さん。改装工事で除却も売却もしていないっておかしいですよ」

「だから、最初からつじつまが合わないって言っているのよ」

「ということでは、粉飾の疑いが高いんですね。どうします、萌さん」

僕はまたいつものように萌さんと一緒に徹底調査を行うことを期待した。しかし、

P/Lとは、損益計算書のこと。プロフィット・アンド・ロスト・ステイトメント (profit and lost statement) の略語で、実務では「ピーエル」と普通と呼ばれている。会社の1年間の経営成績(収益・費用)が載っている計算書のことである。

B/Sとは、貸借対照表のこと。バランスシート(balance sheet)の略語で、実務では「ビーエス」と普通と呼ばれている。会社の財産(資産)や資金源(負債・資本)が載っている一覧表のことである。

萌さんの答えは意外なものだった。

「ん？ そんなの何もしないわよ」

「えっ、どうしてですか。この映画館は粉飾しているかもしれないですよ」

「重要性的問題よ。もっとほかに重要なことがあるわ」

萌さんはあっさりと言った。

「……そつななんですか」

「納得がいけないようね。でもこの会社の監査では、もっと重要なことがあるはずよ」

「じゃあ、今日はもうそろそろ定時だから片付けの準備をして」

「えっ、萌さん、定時で終わりですか!! さっきもっと重要なことがあるよ」って

言っただけじゃありませんか。その監査をしなくていいんですか!」

「いいの、いいの。私はこれからこの映画を見に行かなきゃならないんだから」

萌さんはいつのまにか「コピー」していた映画パンフを持っていた。

「それって、もしかして調査に入れるものなんじゃないんですか」

「あんたも細かいことにするさいわねえ。あとで調査に戻しておくからいいのよ」

「やっぱり調査なんじゃないですか!」

そのあと、萌さんは本当に定時きっかりに仕事を切り上げて、都心の映画館へと行ってしまった。

それから、僕らが再び出会うのは一カ月後のことになる。

3

一カ月後。再び鎌倉フィルム・エンタープライズへの往査のために、駅前コンコースで待ち合わせをしていた。

先に着いた僕は、駅の改札から出てきた萌さんを見つけた。

「萌さん、おはようございます。よく考えたらあれから一カ月、まったく会わなかったですね」

僕は都心を離れた会社での深夜残業の日々が続きずいぶんと事務所に戻っていなかったのだ。萌さんと会うのも久々だったのだ。

「おはよー。そんなに会ってなかったっけ？ どうりで最近なんかストレスが溜まると思ったわ。単にいじめる相手がいなかっただけなのね」

除却（じょきゃく）とは、固定資産を捨てること。その固定資産に残っていた価値や廃棄物処理業者への支払いが「固定資産除却損」と呼ばれる費用になる。

「それはどついつ意味ですか」
僕の抗議を萌さんは軽く笑って受け流し、さっさとクライアントがある方向へと歩き出した。

「そういえば私、カッキーだけじゃなくて事務所のみんなともずいぶん会っていないわ」

「えっ、萌さんもなんですか」

「そうよ。ここのところずつと出張続きだったしね。カッキーもそうだけど、山さんに大津さん、定家くん、プリンスにも全然会っていないわね」

「前はいつもみんな一緒に行動していたんですけどね」

「仕方ないわよ。事務所の合併とかでうちの部門も大きくなったんだから、ほかのいろんな人たちとも仕事をするようになるのも当然だわ。でも……」

「でも、何ですか」

「カッキーみたいな昔からの仲間と会つと、やっぱりホツとするわね。みんな元気かしら……」

鎌倉フィルム・エンタープライズ本社の倉庫を間借りした監査部屋に着くと、萌さんはさっそく経理担当の三浦さんと呼んだ。

「おはよう、三浦さん。さっそくなんだけど、例のあの映画はどつなつたかしら」

「プロデューサーの方からレポートが届いているので、まずこれを見てください」

三浦さんは持っていたレポートを萌さんに手渡した。

「っーん……」

レポートを見たとなん、萌さんは黙り込んでしまった。

「萌さん、それは一体何の映画のレポートなんですか」

「前に話した『ウィンドウズ戦記』よ。全国公開直前のレポートがこれよ」

萌さんは僕にちょっとだけ見せてくれた。

そこには各上映映画館の予想観客動員数やパンフ・グッズ類の売上見込みなどが書かれてあった。

しばらくすると萌さんは倉庫の奥のほうへと入っていき、何冊かのファイルを抱えて戻ってきた。

「札幌、東京、名古屋、大阪、福岡。これで全部ね」

そついいながらファイルを机の上に並べていった。

「これは何ですか」

「『ウィンドウズ戦記』が上映されている各映画館の情報ファイルよ。事業報告書だけじゃなくて劇場の上映状況や座席配置といった基礎情報も入っているわ」

萌さんはそれらのファイルを必死に読みだした。

一時間後、萌さんはあちこちに携帯電話をかけまくり、最後に僕に話し掛けた。

「ねえ、カッキー。今度の日曜日、一緒に映画に行かない？」

萌さんはかわいらしい笑顔で僕に言った。

「も、萌さんと一緒にですか!？」

「ほら、実はさっき会社の人から前売券を安く譲ってもらったんだけど」

萌さんは僕の目の前でチケット一枚をひらひらさせた。

「はっ、はい、こんな僕でよかったです。いや、僕なんかでいいんですか」

突然のことだったので、ちょっと気が動転してしまった。

「デートなんだけど、嫌なら別にいいのよ」

「行きます、行きます。行かせてください!」

4

日曜日。

昨日慌てて買い込んだ服を着込んで、萌さんに指定された駅で待っていると、駅の構内とは逆のほう、つまり外から萌さんがやってきた。

「あれっ、どうして外から来たんですか」

「いろいろあったのよ。じゃあ、映画館に行こ!」

僕は萌さんに連れられて映画館へと向かった。

その途中、萌さんは僕との会話はそこそこに、いろいろあたりを見回しながら歩いていった。

「萌さん、僕の話聞いていますっ?」

「えっ、何か言ったの?」

「もついいです……」

ついに映画館に着いた。

入り口のチケット売り場で換えたその映画はもちろん恋愛映画などではなく、『ウインドウズ戦記 THE MOVIE』。

「やっぱり、監査の二環とこのシートなんです……。『うなるんじやないかと薄々感じてはいたんですけど』」

「まあ、そう言わないですよ。安く映画が見れるんだし」

とりあえず僕は「萌さんと一緒に映画が見れるからいいか」と思い直すことにした。

そのとき、僕はあることに気づいた。

この映画館があつた改装時に粉飾の疑いがある問題の映画館だ、ということ。

映画館に入ったあと、萌さんはグッズ売り場やあちこちに張つてあるポスターなどを見回していた。

そして前の回の上映が終わわり観客が中から出始めると、萌さんは突然僕の手を握つた。

「えっ、萌さん……、んっ、何ですか、これは」

手のひらの中には、何か小さい機械らしき感触があった。

「カウンターよ。知らないの？ そのボタンを押してみて」

手渡された僕は言われるままに押してみた。

カシヤ カシヤ カシヤ

「ねっ、押すごとに数字がカウントされていくでしょう。これで次の上映の観客数を数えるのよ」

「本当にですか!? これも監査なんですか」

「観客数の実査よ。暗くなったら人が見えにくくなるから、暗くなるまでの短い時間が勝負だからね。あと、上映が始まって途中から入ってくる人がいるから、入り口はいつも注意して見ておくのよ。それじゃ、私が左半分を数えるから、カシキーは右半分ね」

「もしかして、座る場所も別々なんですか」

「当たり前でしょう。それじゃ、カウントを始めるわよ」

萌さんはそう言つて、さりげなく客席をまわりながら人数を数え始めた。

萌さんと並んで映画を観ることすらできないとは、どうやら最悪のデートのようだ……。

5

― 日後。

事務所です仕事をしていると、萌さんに声をかけられた。

「カッキー、先週の映画興行のレポートがクライアントから来たわよ」

「本当ですか。僕にも見せてくださいよ」

そこには、以前見たように各上映映画館の観客動員数やパンフ・グッズ類の売上などがかかれてあった。

「これには、このまえの映画館の観客動員数も書いてあるんですよ。何人って書かれています?」

「たしか、東京で日曜日午後一時からの回だったわね。えっと、当日券が四三人、前売券が二二人で計六五人だって」

「あっ!」

僕は思わず叫んでしまった。というのも、あのとき数えた人数が合計六人だったからだ。これは映画館側に虚偽報告の疑いがある。経理でも不正がなされている可能性が高い。

「萌さん、これは映画館に粉飾の疑いがありますよ。やはり改装時の粉飾の件もあるのです、あの映画館は怪しいです!」

僕は力を込めて言った。

しかし、

「ふん、そうかなあ」

萌さんは実にそっけない返事だった。

「どうしてですか、萌さん! 改装時の粉飾の件は確かめたわけではないんで真相はわかりませんが、観客数については明らかに異なっているんですよ」

「あのね、カッキー」

興奮した僕をなだめるように、萌さんはやさしく語りだした。

「まず改装時の粉飾の件はただけど、あの映画館はただちゃんと正確に固定資産を

計上できていなかっただけだと思つた」

「えっ!?!」

「最初に映画館を作ったとき、仮に建物に八 万円、観客席に二 万円かかったとしたら、B/Sにはどう計上する?」

「それは 建物八 万円 器具備品二 万円 ですよ」

「カッキーならそうするでしょうね。でも、経理の知識がない人だったら 建物一

万円 とする人もいるんじゃない?」

「うーん、そうかもしれないですね。でも、それがどうしたんです」

「まだ、わかんない? 何年も前に 建物一 万円 って計上していたら、器具備品だけを除却するときはどうすると思つ?」

萌さんはいたずらっぽく、にやっと笑った。

「あつ……今さら 建物一 万円 の中から器具備品の部分だけを取り出して除却損を計算するのは大変ですよね」

「そうなのよ。あの映画館は過去の器具備品の除却損などを出さずに、改装にかかった出費をそのまま修繕費として費用処理したんじゃないの。もしくは、新たに器

具備品として資産計上したか。まあ、中小企業ではよくある話よ」

萌さんは教え諭すように僕に言った。

「そつななんですか……」

「そして、観客数の件についてもよくある話よ」

「えっ!?! よくある話だ、ってことで見逃していいんですか。明らかに人数が違つたんですよ」

「だから、落ち着いて私の話を聞きなさい。水増ししている人数は五人。これは、おそらく前売券の人数の水増しよ」

「前売券? どうしてそんなことをするんですか」

「前売券って、その券が使われたときに売上を計上すべきなんでしょうけど、すでに入金があるんだから、使われたときより先に売上にすることも可能ではあるのよ」

「先に売上を計上して何の得があるんです? トータルで見れば総額は同じじゃないですか」

僕の言葉に、萌さんは首を横に振った。

「違うの。映画の世界って初日や第一週の興行収入で評価されやすいのよ。だから前売券を使ってちょっと数字を操作することがけっこうあるのよ」

「そういうえば、僕らが行った日もたしか公開二日目でしたよね」

「ということば、ちょっと人数が増えているもおかしくはないのよ」

萌さんに言われて、僕は一応納得した。

しかし、どうしてもわからないことがあった。

「ちょっといいですか。萌さんは最初から人数の報告は当てにならないってわかっていたんですよね。だったら、一体何のために映画館まで行ったんですか」

「人数については、一応確かめたかっただけよ。本当の目的はね、カッキーと一緒に映画を観たかったから」

「ほっ、本当ですか!?!」

僕は自分でも顔が赤くなっていくのがわかった。

「う・そ・よ。冗談よ、カッキー。そんなに赤くなられちゃ、私まで照れるじゃない。私があの日いろいろと見回っていたのを覚えてる? 実はカッキーが待ち合わせ場所に来る前からただけ」

「そう言われれば、僕と一緒にのときもずっとキョロキョロしていましたよね。あれに何か意味があったんですか」

「大アリよ。だって私、このレポートにある宣伝費が本当に使われていたかどうかを確かめていたんだから」

宣伝費　今、思い出した。萌さんが映画館で特にポスターやグッズ類をチェックしていたことを。

「映画館にあるはずのグッズ類も足りなかったし、駅周辺から映画館までの道のりに張ってあるってレポートに書いてあったポスターや看板も、ほとんどなかったのよねえ」

「萌さんは最初から、宣伝費が正しく使われているかどうかを確かめたかったんですか」

「前にも言ったでしょう、株式公開準備の会社の監査ポイントは内部統制だって。宣伝費の金額が正確に経理部に報告されているかどうか、というのも重要な内部統制の一つよ。そして、内部統制で最も注意しないといけないのは、お金や権力が一番集まっている所。そういう所が不正の温床になるからね。この会社でお金や権力

が一番集まっている所といえは？」

「えーっと。一番、お金や権力がある所……もしかして、それって萌さんが憧れていた……」

「そうよ。この会社でいうならば、企画から宣伝まで映画に関わるすべての費用を握っているプロデューサーしかないじゃない」

萌さんは寂しそうに笑った。

「じゃあ、萌さんは最初からプロデューサーに目をつけていたんですか……」

「制作費も宣伝費もひとりの権限で決められているんだから、ほとんど内部統制が働いていないっていうことでしょう。そこにメスを入れないわけにはいかないじゃない」

萌さんは悲しげな口調だった。

6

しかし、僕にはまだ一つ、気になることがあった。

「でも、ポスターの数やグッズ類を見ただけで宣伝費に不正があるってわかるんですか？ だいたい、この映画だって全国で上映しているんですから東京だけを見ても仕方がないんじゃないですか」

「ほっ、なかなか鋭い指摘じゃないか」

と背後から聞きなれた声があった。

「たしかに一部だけを見て全体を語ることはできないな、柿本」

「大津さん！」

大津さんはマネージャーで僕によく仕事を教えてくれる人だ。

「久しぶりだな、柿本。最近、見かけなかったがサボっていたのか」

「遅いますよ。夜遅くまでの仕事が多かったんで事務所に戻れなかっただけです。

それで、大津さん。今日は何の仕事で事務所にいるんですか」

「んっ、俺か？ 俺は萌ちゃんから頼まれた仕事があつてな」

「萌さんからの仕事ですか」

「そうなのよ。大津さん、ありがと。それで、どうだった」

萌さんは大津さんに笑顔で尋ねた。

「ああ。一応、これにまとめてあるから読んでみてくれ」

大津さんは、何か書き込みがなされた調書用紙を萌さんに手渡した。

「完璧だね。さすがね、大津さん」

萌さんは調書用紙を一読したあとに、そう言った。

僕は萌さんが読んだ調書用紙をつしるからのぞき込んだ。

「萌さん、これって……」

「そうよ、映画館の情報よ」

その調書用紙にはどこかの映画館の観客数やパンフ・グッズの販売状況、そしてポスターや看板の枚数まで書かれてあったのだ。

「柿本、今おまえ『東京だけを見ても仕方がない』って言っていただろう。だから、俺は大阪で『ウィンドウズ戦記』を見てきたんだ」

「えっ!!」

「ちよつと出張で大阪に行くって聞いたから、日曜日に映画館に行ってもらつように頼んだのよ」

萌さんは楽しそうに言った。しかし、僕には引くかかることがあった。

「でも、大津さんは日曜日には絶対仕事をしない人じゃなかったでしたっけ？ 日曜は婚約者にサービスする日だって」

萌さんと大津さんは顔を見合せて笑った。

「カッキー、そのあたりは抜かりないわよ。もちろん、大津さんには映画のペアチケットを送ったんだから」

「おかげでいい旅行になったよ。翡翠ひすいの分の交通費はかかったがな」
大津さんはそう言って苦笑いした。

「ちよつと いいかな」

「あつ、定家さん。お疲れさまです」

定家さんは僕より年次が一つ上の会計士補で、財務諸表の表示などに非常に詳しい寡黙で真面目な人である。ただ寡黙すぎるため、目立たないことが多い。

「定家くん、定家くん。お疲れさまー。で、どうだった」

相手が定家さんであっても萌さんもテンションの高さは変わらないようだ。

「はい これ」

定家さんも何か書かれた調書用紙を萌さんに手渡した。

「うん、これでいいわ。さすがは定家くん、仕事が細かいわね。ありがとー、最高よ！」

「ああ」

定家さんは照れながらうつむいていた。

「あのう、定家さん。定家さんは何をしたんですか」

「名古屋で 映画を見た」

「定家さんもなんですか！」

「そうよ、ちょうど定家くんが名古屋に出張でね。だから、頼んじやったの あ

っ、ちょっとごめん。電話だわ」

萌さんは携帯を手にした。

「うん。うん。わかったわ、詳しいことはまた今度聞いわ。ありがとっね、プ

リンス！」

そう言つと、携帯を切った。

「萌さん、プリンスくんから電話だったんですか」

プリンス とはもちろんあだ名で、入社一年目の在原^{ありわら}くんのことである。金髪で

いつも派手なブランド物を身にまとっているが、仕事はちゃんとする人である。

「プリンスから写メールが届いたわよ」

そう言つて、萌さんは携帯の画面を見せてくれた。

「あっ、これは映画館の映像じゃないですか！」

その画面には映画館の各所の映像が次々と映し出されていた。

「プリンスにはね、福岡に行ってもらったの。ちょうど出張で北九州にいるって聞いたから」

「ちょっと待ってください。たしか『ウィンドウズ戦記』って全国五大都市で上映でしたよね。ということは、もしかして」

「そうよ。もうメールがきているわよ、山上さんから」

「山上さん？」

山上さん、とは仕事に厳しい代表社員だが、傍目から見ればあまり監査をせずいつもパソコンばかりいじっているように見えることでも有名な方である。

「ほら、見てみなさいよ。カッキー」

萌さんから見せてもらった山上さんから来たメールには、札幌の映画館実査の結

果がこと細かく書かれてあった

7

東京・大阪・名古屋・福岡・札幌。上映されている全映画館の情報を総合した結果、宣伝の実態がプロデューサーからのレポートとは異なることがわかった。

実際のグッズの種類やポスターの数が、プロデューサーのレポートの数字よりも少なかったのだ。

これをきっかけに萌さんが追求した結果、プロデューサーが宣伝費を水増しして発注し、逆に業者から個人的にその何割かをもらう、いわゆるキックバック^[06]をもらっていたことが発覚した。プロデューサーが会社に損害を与え、ワイロをもらっていたことがわかったのだ。

プロデューサーは解任後に警察へ突き出され、今回の事件については終了した。しかし会社内部としては、プロデューサーという絶大な権限を持つ人への内部統制が全然働いていなかった、という問題が残ったままである。

そのため、今後この会社では株式公開を達成するために、萌さんの指導のもとで内部統制の強化を図ることとなった。

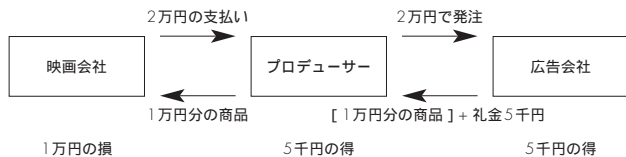
クライアント先からの帰り道、僕は新たな事実を知った。

「えっ、あの『ウィンドウズ戦記』の企画って、もともと萌さんが言い出したんですか!?!」

「そうよ、気がつかなかったの？ カッキー、エンドロールまで見てなかったんですよ。最後のスペシャル・サンクス にちゃんと 藤原萌実 って載っていたのよ」

「そんなことを言われても、帰る人を数えていたのでエンドロールを見る余裕なんてなかったですよ。それにしても、どうやって萌さんの企画を映画化させることができましたんですか」

「企画といってもたいしたものじゃないわ。この会社の現場の人と飲む機会があったて、そこでいろいろしゃべったことがいつの間にか映画になっちゃっただけなのよ」
萌さんはつまらなそうに言った。



キックバックとは礼金のこと。たとえば、本来1万円の商品に対して2万円で発注してあげたら業者はまるまる1万円得するので、その礼金としてプロデューサーは業者から5千円をもらう。つまり、映画会社が1万円損してプロデューサーと業者が5千円ずつ得していたことになる。テレビ局の制作費の不正などでよく使われる手口である。(左図参照)

「でっ、でも、もともとは萌さんが考えた企画じゃないですか。映画は実際の監査ではあり得ないような変な話でしたけど、内容は面白かったですし、萌さんはけっこうプロデューサーにも向いているんじゃないですか」

「本当？ カッキー、ありがと。でもね、今回は残念だわ」
「何が残念なんです？」

「今から考えると、私自身がプロデューサーになって、『ウインドウズ戦記』もちゃんと自分が企画書を書いて自分でプロデューズするべきだったんじゃないかな、ってね」

萌さんがプロデューサーになっていたら、逆にこの映画会社の監査なんてできやないか、と内心思った。

「ねっ、カッキーもそう思うでしょっ」

「そっ、そのほうが会計士の実態もちゃんとわかってもらえたかもしれないですね。でも、そもそも会計士がそんな副業してもいいんですか」

「いいのよ。それも立派な会計士業務の一つ、MAS業務 なんだから」

萌さんは自信たっぷりに言った。

「えっ、どうしてそれが MAS業務 になるんです？」

「ムービー&シナリオ 業務じゃないの？」

「違います!!」

僕は夕暮れの中をてくてくと歩いていて。

「……まあねえ。映画の話じゃないけど、監査のことを世の中に紹介するのも大切な仕事だと思つたよね、私」

「そうですね？」

「だって、私たちの監査って信頼を与える仕事^[07]でしょ。でも信頼は『信頼しろ』って押しつけて生まれるものじゃないじゃない。私たちの仕事ぶりやその結果を見て『信頼しよう』と思ってもらってはじめて、信頼が生まれるものなんじゃないの。だったら、私たちの本当の仕事ぶりを少しでも多くの人に知ってもらわなきゃね」

「それはそうですね、映画とかにしないとダメだったことなんでしょう。そんな普通の監査人にはできないですよ」

『信頼をカタチにする。それがわたしたち公認会計士の仕事です。』が日本公認会計士協会の標語となっている。

「映画にするなんてのは特別よ。普段からクライアントの人たちが私たちの仕事ぶりをしているんだから、毎日そのことを忘れずに仕事をすればいいと思うわ。その小さな積み重ねから信頼も生まれてくるんじゃないかしらね」

「そうかもしれませんね、わかりました。そういえば、萌さん。あの映画『ウインドウズ戦記』って、やっぱり僕らの監査チームがモデルですか」

「まあ、そうですね。あなたがフィクションでもなかったでしょっ？」

萌さんは笑って聞いてきた。

「そうですね。最後にチームの仲間たちが集結するシーンなんかは、現実そのものかもしれませんね。ちなみに、あの頼りなくていつもオロオロしていた会計士補って、もしかして僕ですか」

「あっ……まあ、いいじゃない。気にしないでよ」

「とっつ」とはやっぱり僕なんですね……でも、いいですよ。俳優さんたちのほうが断然格好よかったですし」

そう言いながら、僕は映画の中の俳優たちにチームのみんなを重ね合わせて思い浮かべてみた。

すると、遠く離れていても助け合つ、本当の汗をかいているチームのみんなのほろが格好いいと思えてきた。

でも……やっぱり映像的にはちょっと格好悪いや、あはは。

エピソード

数日後。

事務所に戻ると萌さんが調書の山の中で何やら仕事をしていた。

「あれっ、一体こんなところで何やってるんですか!？」

萌さんの机の上にはペンやインクが散乱していた。萌さんは何やらイラストらしきものを手にしている。

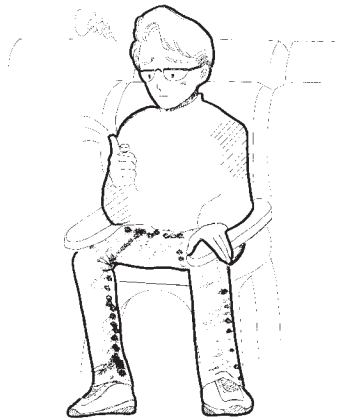
「何ですか、萌さん。その手にしているイラストは」

「いっ、いやー。映画化に引き続いて、今度は会計士を主人公にしたマンガを描こうかなあ、なぐんて思っちゃって」

萌さんはちよつと照れ笑いをした。

「萌さん。もしかして、これも M A S 業務 だって、言い張るつもりですか」

1・2・3...



「僕は冗談のつもりで言ったのだが、萌さんは驚いた顔をした。
「えっ、MAS業務ってマンガ・アニメ作成業務じゃなかったの!？」
「絶対、違います!!」

映画の中の会計士たち……あはは 事件 おわり